

第4章・産業に残した足跡② システム化学

浜松・遠州

久遠の絆

⑫

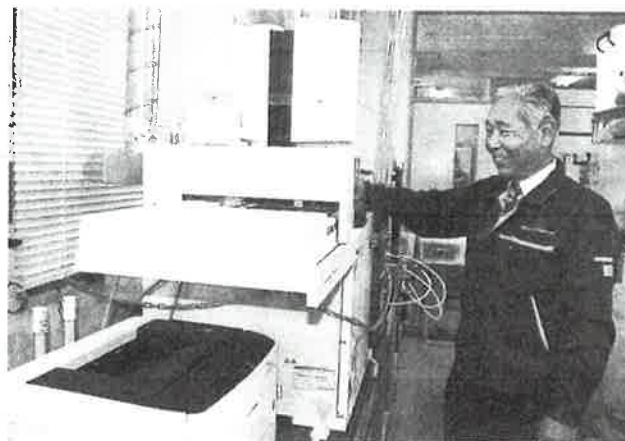
浜松工業高100周年

県立浜松工業高のシステム化学科(旧工業化学科)は1915年に設けられた染料を起源とする。県西部の産業が繊維からさまざまなものづくりへと広がる中で、多岐にわたる分野で卒業生が活躍している。

浜松市南区の環境分析会社「サンコー分析センター」社長の松本恒夫(68)は65年度卒、浜北区根堅はメッキ材販売会社から同社が分社化された76年から経営に携わる。「ちょうど環境問題が叫ばれ始めた時期。当時の馬込川や芳川は、染色工場の排水で色が付いていた」と当時の様子を語る。

地道に分析 何でも経験

分析機器の調子を確認する松本＝浜松市南区下江町のサンコー分析センター



中学時代、井戸水の水質検査を体験したのがきっかけで分析に興味を持ち、工業化学科に入った松本にとつて、うってつけの職場だった。

会社は企業や自治体から依頼を受け、水質や大気、

臭気などの分析を手掛けるほか、近年は企業の環境コンサルティング事業も拡大してきた。同社社員26人のうち、浜工卒業生は11人に上る。松本は「分析はこつこつとやるのが大切な仕事。真面目な人が多い浜工生に向いているのでしょ」と後輩たちの仕事ぶりを見守る。

工業用の医薬品材料や樹脂原料などを製造する「ケイ・アイ化成」(磐田市塩新田)常務の伊藤賢司(60)は72年度卒、同市福田中島は、機能性薬品の生産に長年携わる。入社後、生物

化学の分野をあらためて学び直したという伊藤は、「浜工で培った化学の基礎と、何でも経験するという意識が役立った」と振り返る。

設備製造会社で活躍する人材もいる。熱処理機器製造の「エコム」(浜松市北区)常務の菅原基(53)は80年度卒、西区古人見町は「周囲は電気や機械に詳しい人が多い中、化学の知識を強みとして生かした」と強調する。

ことしから全国鰻産地間屋組合連合会長を務めるヤマサウなぎ(西区)社長の辻村典彦(57)は76年度卒、西区古人見町や、テニス用品専門店として知られ、コート設計も手掛けるアオヤマ(中区)社長の青山剛(52)は80年度卒、中区肴町にも各分野で存在感を示している。(敬称略)